

Title	竹越与三郎の中国・朝鮮観に関する一考察：福沢諭吉との比較において
Sub Title	How Takekoshi Yosaburo saw China and Korea : a comparison with Fukuzawa Yukichi
Author	堀, 和孝(Hori, Kazutaka)
Publisher	慶應義塾福沢研究センター
Publication year	2010
Jtitle	近代日本研究 (Bulletin of modern Japanese studies). Vol.27, (2010. ) ,p.117- 136
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20100000-0117">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20100000-0117</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 竹越与三郎の中国・朝鮮観に関する一考察

——福沢諭吉との比較において——

堀 和 孝

はじめに

明治二七年三月二八日、金玉均が上海で朝鮮人の刺客の手により暗殺されると、生前から金と親交の厚かった福沢諭吉は早速『時事新報』紙上に筆を執り、清国政府の処置を批判した。福沢の批判の骨子は、事件後の清国政府の対応が国際法の慣例に反するというものだった。曰く、「金氏の上海行に就ては、支那政府の筋、即ち支那公使館の辺にては熱心に周旋して、金氏に対するの情誼は同国の親友も啻ならず、最も好意を極めたるよしにて、同氏の旅行は専ら其好意を当にして思ひ立ちたるもの、よしなりしに、一たび日本の土地を離れて上海に上陸するや否や、支那人の挙動は全く一変して、殺害当時の始末と云ひ、死体の処分と云ひ、毫も親切の意味なきのみか、冷淡水の如き其反対に、謀殺の下手人なる洪鐘宇に対しては其取扱ひ甚だ寛にして、現に金氏の死体検証の際などは縛しもせずして其場に列せしめたる如き、犯罪人を取扱ふの法としては見る可ら

「<sup>(1)</sup>」。福沢の筆致を見てみると、清国政府の対応を厳しく批判すること、金を失ったことによる心の動揺を静めようとしているかのようである。しかし、福沢がそのような文章を書き連ねることによっても喪失感を埋めることができなかつたということは、この後、金のための法要を個人的に行い、その遺族を日本に呼び寄せ、生活を保護しようとした事実から察せられる。

こうした尋常ならぬ思い入れを伴った福沢と朝鮮の関わりを、「政治的恋愛」<sup>(2)</sup>と評したのは、福沢門下の言論人竹越与三郎である。では、その竹越は朝鮮について、またその背後に控える中国についていかなる認識を示したのであるうか。その点を福沢との比較において解明した研究はまだ皆無といつてよい。

そこで本稿では、両者の中国・朝鮮観を比較考察してみたい。私がこのようなテーマに関心を持つのは、「知らず垂細垂なるものは地理的空名の外、果して何ものぞ」<sup>(3)</sup>と説く竹越の立論と比較することにより、西洋文明の紹介者というイメージの陰に隠れがちな福沢の東洋連帯論者としての側面が、明確に浮かび上がると考えられるからである。<sup>(4)</sup>私は、先に発表した論考において、福沢と竹越の思想的対立を生みだした根本的な要因として、明治維新観の相違が挙げられることを指摘した。<sup>(5)</sup>しかし、日本を東洋の一国であると考えるか否かという点をめぐっても、師弟の間には溝が存在していたのであった。

## 一 近世日本の国際関係

日本と中国・朝鮮との交流は、文献史料によって確認できる範囲でも千年以上の歴史を有している。差し当たり問題となるのは江戸時代の日本と中国・朝鮮との関係であるが、近世日本の国際関係の特色として、幕府

が地方の諸藩に特定の相手との外交を委任したことが指摘できる。対馬の宗家、薩摩の島津家、蝦夷地の松前家は幕府の代理としてそれぞれ朝鮮、琉球、蝦夷との関係の維持に当り、代償として貿易などの利益を与えられていたのである。

このうち対馬を介した朝鮮との関係は、ほぼ対等な国家間の外交といってよいものだった。江戸時代を通じて二回、朝鮮から使節が訪れ、その際には朝鮮国王と徳川将軍（日本大君）との間に対等な書式の国書が交わされたのである。ただし、この関係には細かく見ると次のような不平等な要素も含まれていた。

(1) 対馬の宗家は江戸に参勤する大名であったが、朝鮮にも半ば従属しており、釜山に船を送って貿易する際には朝貢に類する儀礼を行っていた。

(2) 日本側は朝鮮の通信使を朝貢使とみなしたが、朝鮮側はかつて侵略を受けた「夷狄」の実情を偵察する機会と考えた。朝鮮の使節は將軍の代替わりに日本を訪れるが、將軍は答札の使節も朝鮮国王の代替わりの祝賀使節も送らない。

(3) 「大君」という称号は朝鮮では国王の王子に与えるものであった。一方、日本側は「大君」と「国王」が対等な国書を交わす以上、「大君」の上にある「天皇」は「国王」の上にある中国の「皇帝」と同格であると考えた。

つまり、近世の日朝関係は互いに相手側の蔑視を知らながらそれを容認したために、結果として対等性が生じている関係だったと言えるのであるが、こうした関係に先に終止符を打ったのは日本の側だった。対馬は一七七五年、日朝貿易の主要部分であった私貿易の断絶を宣言しているが、これは一八世紀の日本では朝鮮からの主な輸入品である生糸や朝鮮人参の国産化が進み、朝鮮貿易の重要性が低下していたことと関係していた。

さらに一八世紀末の老中松平定信は通信使の応接を対馬で行う方針を申し入れている。その結果、一八一一年を最後に通信使の派遣・応接は途絶えることとなった。一方、朝鮮を属邦とする清（一六四四年成立）は、内陸部への遠征が一段落した一七五七年に貿易港を廣州一港のみに制限していた。こうして日本と中国・朝鮮は互いに無関心となり、西洋諸国に対する共同行動の基盤を失ったのである。<sup>(6)</sup>

## 二 福沢の中国・朝鮮観

明治維新に伴い、上述したような対外関係は西洋国際法の下に再編成されることとなる。まず江戸時代に正式な外交関係のなかった清との間には明治四年、日清修好条規が結ばれた。これに対し、朝鮮との国交樹立は難航した。維新を知らせる日本の国書に用いられていた「皇」や「勅」といった言葉を、朝鮮側が華夷秩序の文脈で理解し、自国を貶めるものとして受け取りを拒否したからである。そのため日朝間の外交関係の確立は、日清修好条規の締結から五年を経た明治九年まで待たねばならなかった。

福沢の著訳書のなかで、中国について体系的に記述した最も早いものとして挙げられるのは、『世界国尽』（一八六九）である。欧米の地理書を基に書かれたこの啓蒙的な本のなかで、福沢は、「そも／＼「支那」の物語、往古陶虞の時代より年を経ること四千歳、仁義五常を重じて人情厚き風なりとその名も高かく聞えしが、「政事の立方は、西洋の語に「ですぼちつく」といへるものにて、唯上に立つ人の思ふ通に事をなす風なるゆへ、国中の人皆俗にいふ奉公人の根性になり、帳面前さへ濟めば一寸のがれといふ氣にて、真実に国の為を思ふ者なく、遂に外国の侮を受るよふになりたるなり」と述べている。<sup>(7)</sup>だが、人民の間に見られる「奉公人の根

性」を一掃して国民としての自覚をいかに持たせるかという課題は、同じ時期の福沢が直面していたものでもあったはずである。とすると、中国の社会と日本の社会の質的な相違は何であったのか、という問題が浮上することになるわけであるが、そうした問題について福沢が明確な見解を示すようになるのは、彼の著作中、「唯一の体系的原論」<sup>(8)</sup>とも評される『文明論之概略』（一八七五）においてであった。そのなかで福沢は次のように言う。

我日本にても古は神政府の旨を以て一世を支配し、人民の心単一にして、至尊の位は示強の力に合するものとして之を信じて疑はざる者なれば、其心事の一方に偏すること固より支那人に異なる可らず。然るに中古武家の代に至り漸く交際の仕組を破て、至尊必ずしも至強ならず、至強必ずしも至尊ならざるの勢と為り、民心に感ずる所にて至尊の考と至強の考とは自から別にして、恰も胸中に二物を容れて其運動を許したるが如し。（中略）此一事に就て文明の前後を論ずれば、支那は一度び変ぜざれば日本に至る可らず。西洋の文明を取るに日本は支那よりも易しと云ふ可し。<sup>(9)</sup>

このような議論が、西洋の「文明」を頂点とする単線的な発展段階論を前提にしていることは言うまでもない。ただそこで注意すべきは、「西洋諸国を文明と云ふと雖ども、正しく今の世界に在てこの名を下だす可きのみ。細にこれを論ずれば足らざるもの甚だ多し。戦争は世界無上の禍なれども、西洋諸国常に戦争を事とせり<sup>(10)</sup>」<sup>(10)</sup>と言うように、福沢は西洋の「文明」を相対的にとらえる視点も有していたということである。西洋「文明」の先進性を承認しつつもそれに嫌りなさを感じていた福沢が、その後、東洋連帯論を唱えるようになるの

は自然な成り行きであつたと言えるだろう。福沢は、明治一四年九月に出版された『時事小言』のなかで次のように述べている。

東洋諸国（波斯、暹羅、支那、朝鮮、日本を指す―引用者）相互に其風俗同じからずと雖ども、之を概して西洋諸国と相對するときは、東西更に大に異なるものを見る可し。人種を異にし、宗旨の起源を異にし、道徳の口碑を異にし、文物を異にし、習慣を異にし、衣食住の有様を異にし、随て其人情も亦相異なるを得ず。既に人情を異にすれば、同一の人類にして自から相互に異類視するも亦必然の勢なり。

それでは、「東洋諸国」のうちどの国が「魁」となつて優勢な「西洋諸国」に対抗すべきなのか。福沢は、「波斯、朝鮮等は亦も頼む可らざるものとして、亜細亞州中最大の支那に依頼せん歟、我輩これを事実<sup>(11)</sup>に証して断じて其頼むに足らざるを知る」とし、「方今東洋の列国にして、文明の中心と為り他の魁を為して西洋諸国に当るものは、日本国民に非ずして誰ぞや。亜細亞東方の保護は我責任なりと覚悟す可きものなり」と言う。福沢が朝鮮政府から派遣された紳士遊覧団の随員二名を慶應義塾に受け入れたのは、正にこうした東洋連帯論を構想しつつある時だったのである。ロンドンにいる小泉信吉等へ宛てた書簡のなかで、福沢は、「朝鮮人は貴賤となく毎度拙宅へ來訪、其咄を聞けば、他なし、三十年前の日本なり」と記している<sup>(12)</sup>。朝鮮の現状を幕末の日本との類比において理解した福沢は、この二年後、門下生の牛場卓蔵を朝鮮に派遣するに際し、「嘉永以来の洋学者」が「鎖攘の殺氣凛々の中に立て一身の危険を顧みず世の風潮に激して以て開明の好結果を得せしめたるが如く、率先の人物を得て国人一般の心を開くこと緊要なりと信ず<sup>(13)</sup>」と述べた。

しかし、一七年一二月、金玉均や朴泳孝などが起こした甲申事変は失敗に終わり、開化派は逆に壊滅的な打撃を被ることとなる。<sup>(14)</sup>「我国は隣国の開明を待て共に亜細亜を興すの猶予ある可らず、寧ろ其伍を脱して西洋の文明国と進退を共にし、其支那朝鮮に接するの法も隣国なるが故にとて特別の会釈に及ばず、正に西洋人が之に接するの風に從て処分す可きのみ」<sup>(15)</sup>と説く「脱亜論」が『時事新報』に発表されたのは、これから約三ヵ月後の三月一六日のことである。だが、その後も福沢と朝鮮との関わりは完全には途切れなかった。甲申事変後、日本で亡命生活を送っていた金玉均と福沢の関わりについては、「予が芝浦の海水浴旅館に、金玉均氏と対話の節、一人の田舎爺がつか／＼と入り来り、造作もなげに金玉均氏と話すを見れば、紛らひもなき福沢翁であつた」<sup>(16)</sup>という徳富蘇峰の証言もある。そして日清戦争後、甲午改革運動の開始とそれに対する親露派グループの反撃という事態が起ると福沢の身边も一段と慌しくなった。朝鮮国王がロシア公使館に移住したいわゆる露館播遷の直後、福沢は亡命朝鮮人と善後策を打ち合わせるべく芝三縁亭で会合を開いているが、そこに同席した竹越によると、福沢は首領格の人物に対し、「今日の事、到底、日本の独力を以て、韓国の事を了するの機にあらず、宜しく英国をして、日本の党与たらしめざるべからず、然かも英国は自家の利害の感ぜられざる事に関与干渉する者にあらず、故に英国をして朝鮮に利害を感ぜしめざるべからず、是れ足下等の任なり」<sup>(17)</sup>と具体的に指示を与えたのだという。

こうした福沢の努力にもかかわらず、朝鮮国内の開化派は衰退の一途を辿った。かかる現実を前にしては、福沢も、朝鮮の現状を幕末の日本に見立てた改革路線の破綻を認めざるを得なくなる。三一年四月二八日、『時事新報』に掲げた「対韓の方針」のなかで、福沢は「我国従来の対韓略」が功を奏さなかった「原因」を分析し、「我国人が他に対して義侠心に熱したる」ことと「文明主義に熱したる」<sup>(18)</sup>ことの二点を挙げてい



しかし、それでも福沢は、朝鮮改革の“夢”を完全には捨てきれなかった。福沢が最終的に到達した改革路線とはいかなるものだったのか。それは、「露人が来るも、英人が来るも、又朝鮮の政府が如何に変化するも、政治上には一切関係せず、只多数の日本人を移住せしめ、殖産興業に従事して彼の人民と雑居し、交通触接の間に次第に其智識を開発せしめ、大に富源を開て与に天与の利益を共にせん<sup>(19)</sup>」というように、経済交流に主眼を置いたものだったのである。

以上のように、朝鮮の改革に情熱を傾けた福沢が、清国に警戒の念を抱いたのは当然である。清国の朝鮮に対する宗主権を強める契機となった壬午事変直後、福沢は『兵論』(一八八二)を著し、「支那人を文弱なりと目して之を軽侮するは、多くは我武人流の所評にして当るものに非ず」、「軍国兵馬の事は百年の謀に非ず。压制政府の兵にても自由政府の兵にても、強き者は勝て弱き者は敗す可し。其強弱は、軍人の多寡と、兵器の精粗と、隊伍編制の巧拙と、国財資本の厚薄とに在て存するのみ<sup>(20)</sup>」と説いている。しかし、日清戦争後、清国で日本への留学熱が徐々に高まるとそうした敵対的なイメージにも変化があらわれることとなった<sup>(21)</sup>。三一年九月二二日に『時事新報』に掲載された「支那の改革に就て」のなかで、福沢は次のように述べたのである。

抑も日支両国は古来同文の国と称し、日本の文字は支那の伝来にして、国の大小を問へば固より比較の限りに非ず。又人口は其十分の一に過ぎず。然かのみならず宗教道德学より百般の工芸技術に至るまでも、其本を尋ねれば孰れも支那より輸入したるものにして、支那は正しく日本の師国と認めざるを得ず。(中略)日本の進歩著しと云ふと雖も、開国以来僅々四十年の事にして、支那に比すれば単に一步を先んじて西洋文明の主義を取りたるがために、兎に角に世界の一国として認められたるに過ぎず。(中略)彼等が

真実、心の底より我に親しみ、来て益を乞はんとするに当りては、飽くまでも旧来の関係を忘れずして、旧師国、旧恩人を以て之を遇し、あらん限りの力を尽して彼の求むる所に応じ、其足らざる所を助けて、幾千年来の師恩に酬い、今後互に文明の事を共にして真実兄弟国たることを期す可きのみ。

福沢はこのように述べた上で、「日本の改革が王政維新より始まりたるに等しく、支那の改革も先づ北京政府より着手せざる可らずとて、日本人が自から書下したる筆法を其儘に支那に試みんとすることもあらんには、非常の間違ひと云はざるを得ず」、「支那の治療には務めて性急の弊を避け、患者の好む所、矢張り漢方流の煎薬ならんには、強ひて之を禁せずして其所好に任せながら、煎薬の中に西洋流の薬物を混じて之を与ふるなど、次第に新主義の効能を知らしめて、漸を以て化する手段を執る可し<sup>(22)</sup>」と説いている。『福翁自伝』（一八九九年）にはこれとは反対の主張が見られるので、福沢が政治主導の改革路線を完全に脱却していたかどうかには疑問も残るが、<sup>(23)</sup>ともかく朝鮮との関わりがほろ苦い経験となっていたことだけは間違いない。

### 三 竹越の中国・朝鮮観

福沢の中国・朝鮮観の基調をなしていたものが文明主義的東洋連帯論と称すべき立場であったことは、既に明らかとなったものと思われる。それでは、竹越の中国・朝鮮観にはどのような特色が見られたのであろうか。その点について検討するに先立ち、両者の関係について簡単に述べておくこととしよう。

竹越は、慶応元（一八六五）年一〇月一四日、父清野仙三郎、母イクの次男として、武蔵国本庄に生まれて

いる。明治三年、一家とともに越後国柿崎村へと移った与三郎は、五年、村の浄善寺に設立された郷学に入学するのだが、この年は福沢が『学問のすゝめ』の出版を開始した年でもあった。与三郎はそれらの著作を愛読していたのであろう、「一言を出せば天下の法となり、一文を草すれば万民に伝唱せらるゝこと先生の如くんば、また以て足れり」というほど福沢に対して強い憧れを抱くようになった彼は、小学課程を終えると、家業の酒造業を継がせようとする両親の反対を押し切って上京、一四年九月、慶應義塾に入学する。

しかし、与三郎の期待は裏切られた。燃え上がる自由民権運動に共鳴するようになった彼にとつて、明治一四年の政変後、福沢が説くようになった官民調和論はナンセンス以外の何物でもなかったからである。与三郎は、福沢に対し「政府民間の争、激甚にして、而して後、天下の事、初めて進歩変革あるを得べし」と認め(25)た反対意見書を提出したことでかえって時事新報社への入社を斡旋されるが、短期間で退社し、東京商業学校や前橋英学校などの教員を経て、二三年一月、二歳年長の蘇峰が設立した民友社に入社する。泰西的平民社会に向かつて「社会運動ノ旗頭ニ立ツ」主体は「明治ノ青年」(26)であるという主張によって論壇の寵児となった蘇峰に対する当時の竹越の心酔ぶりは、「余之先生之政論を見るや、政論之場にも此かる高尚重厚之志望を有するものありやと思ひ、遂ひに及ばずながら所謂の改革家之後辺に歩せんと決心せり」という私信の一節に読み取(27)れる。竹越は三国干渉後、藩閥支持に回った蘇峰と袂を分ち、二八年末に民友社を退社しているので、その在籍期間は決して長くなかったが、その後、竹越が時事新報社への一時復帰を経て、二九年七月に創刊した雑誌『世界之日本』の基本的姿勢が、民友社時代に姿を現していたことには留意しておく必要がある。(28)竹越は、日清戦争終結間もない二八年四月一三日、『国民之友』に発表した論説「世界の日本乎、亜細亜の日本乎」のなかで次のように述べている。

知らず亜細亜なるものは地理的空名の外、果して何ものぞ。其人種相似たりと云ふ乎。亜細亜列国の人種相異なるや、日本人種と欧羅巴人種の相異なると毫も異ならず。(中略) 然らば則ち文明の性質に於て、亜細亜は一種の形体を具ふる乎。釈迦は曾て印度より起れるが故に、仏教を亜細亜文明と称する乎。耶穌は亜細亜の猶太より起りしが故に、基督教を亜細亜文明と称せんとする乎。孔子が支那山東に起りしが故に、儒教を亜細亜文明と称せんとする乎。齊しく幾億万の民心を繋ぐ。何れを以つて亜細亜的なりとし、孰れを以て非亜細亜的と為さんと欲する乎。(中略) ヘブルウの昔人、西方に日の沈むを見て、欧羅巴と名け、東方に日の昇るを見て、亜細亜と名けしのみ。若し、日本国民にして自ら其の土に立ちて東西を顧み、支那大陸より欧洲を包含して、之を日西と名け、南北米州を名けて、日東と為すも、また妨げず。<sup>(29)</sup>

あるいは極論に思われるかもしれないが、アジアという概念は、元を正せば、そこに暮らしている人々が自ら主張し始めたものではない。「ヨーロッパ産のこの言葉は、東アジアに到来した当時、ヨーロッパから見た東方全域を示す残余概念として用いられ、漢字文化圏の人々はそれが空虚な概念であるがゆえに受け入れたに過ぎなかった」<sup>(30)</sup>のである。だとすると、竹越はアジアという言葉の本来の意味を正確に掴んでいたことになる。それではなぜ、竹越はこの時期、「亜細亜」が「地理的空名」に過ぎないことを殊更に強調しなければならなかったのであろうか。それは、彼の観察によれば、日清戦争以後、「日本を以て亜細亜に繋げ、日本人民を蒙古人種に係け、日本の勝利を以て亜細亜文明勝利の兆となし、之を以て欧西人種に反抗せしめ、之を以て欧西文明を敵視せしめ」とする者が一部にあらわれたからである。竹越は、「世界の日本」という観点に立つ

のと「亜細亜の日本」という観点に立つのとは、「国民の精神」の持ち様が大きく異なってくるのだと言う。後者の観点に立つならば、「世界の文明により、世界の勢により、世界の道理により、世界の利益のため」に戦われた「征清の大業」も「地方的、偏安的、地理的、人種的」な性質を帯びてしまうからである。<sup>(31)</sup>

先述した通り、竹越は、露館播遷の直後に福沢と朝鮮政治家との会合に同席していたのだが、それに先立つて右のような世界観を構築していたことを考慮すると、彼が福沢の東洋連帯論的発想に対して疑問を持ったであろうことは想像に難くない。「世界の日本乎、亜細亜の日本乎」から十日後に発表した「深憂大患」と題する論説のなかで、竹越が、「朝鮮政治家は、何時にても門を開きて之を歓迎するの性情を有するものなるを忘るべからず。人或は閔泳駿等が支那の勢力に阿附したるを責めて、兇逆と為すと雖も、事大主義は其国民の性情なるを奈何せん。支那党より見れば、金朴（金玉均と朴泳孝の二人を指す―引用者注）の徒もまた閔の徒に異ならざる也」と述べていることも、そうした予測を強めるのである。

竹越にはまた、福沢のように李氏朝鮮の社会を江戸時代の日本との類比で理解しようとする発想も見られない。竹越の歴史解釈によれば、日本では平安時代末期に「郡県制度」から「封建制度」への移行が起こり、将来の発展の礎が築かれたが、朝鮮はそのような社会変化を経験しないまま今日に至っているというのである。

若し日本国民をして猶ほ王朝の下にあり、人民と同情なく、土着の意志なき国司郡司をして全国を支配せしめたらんには、日本は長く寒貧、荒曠の光景を呈し、人愈よ多くして国益す衰ふること、朝鮮の如くなりしならん。唯だそれ然らず群雄の割拠は王朝の衰弱を来たすと雖も、封建の勢此に成り、人民土地を私有として之を保護するの風を生じ、此の如きもの二百年に垂んとして、国家安康、人民自立の基此に立

ちぬ。(中略) 封建制度なかつせば人民は全く奴隷となりて国家成立の柱礎なるに至りしならん。歴史は封建制度に謝せざるべからざる也。<sup>(33)</sup>

竹越がこう述べてから三年後に清国で義和団事件が発生、それを契機に中国東北部を占領したロシアと日本の間で対立が深まり、三七年二月、遂に日露両国は開戦した。孫文がヨーロッパからの帰途スエズ運河を通過した際、日本海海戦の報道を聞いた現地の人から「おまえは日本人か」<sup>(34)</sup>と歓迎されたというように、日本の勝利は東方の諸民族に大きな勇気を与える出来事であった。しかし、戦争遂行の過程で日本に外交権を奪われていた韓国の人々にとって、その結果は素直に喜べるものではなく、また日本国民にとっても朝鮮半島の経営という問題が残された。かかる情勢をうけて、竹越は「韓人教育に就ての謬見」を発表し、次のように述べている。「若し此保護国誘導に関する官民の輿論を無記名投票を以て決する事としたならば、必ず学校教育に帰着するであらうと思はれる位である、併しこれは慥に迷謬の意見であると云はねばならぬ」。なぜなら、「社会が極めて幼稚で、人文の程度が低い時に、之に高等なる文明を持つて居る国民の教育を施す」<sup>(35)</sup>ならば、「その国民は「文字あるがために労働を賤み、徒に頭のみ発達して手足の発達しないものとなる」<sup>(35)</sup>からである。

その一方、竹越は四二年には蘭領東インド諸島、仏領インドシナなどへ視察旅行を実施し、その成果を『南国記』(二九一〇)の一書にまとめている。「熱帯は自然の宝库にして、唯此宝库を開くもの能く富むを得べし」<sup>(36)</sup>という言葉に見られるように、竹越がこの旅行で強い印象を受けたのは、コーヒー、木材、ゴム、香料などを始めとする南洋の豊富な資源であった。ただ、それとともに彼の目に焼き付いたのは、現地の経済的実権を掌握する中国人の姿だったのである。

世外交趾支那と云へば直ちに西貢を数ふるも、西貢よりも人口饒多の都会其付近にあり即ち提岸是なり。提岸は西貢より西北四マイルの地にありて、人口十六万を数へ、今は西貢と同市を作る。而して此中支那人の数四万二千人を数ふるに至りてはまた盛なりと云はざるべからず。(中略) 支那人は唯だ此地に於て優者なるのみならず、仏領印度支那全体に散在し、南は安南より、北は東京に至るまで、マレー人の国に於ける経済上の権力は、支那人之れを掌握し、仏人は其上に立ちて政權を攬るのみ。<sup>(37)</sup>

アヘン戦争以降の度重なる軍事的敗北にもかかわらず、中国を潜在的脅威と見なすのは日清戦争までの欧米世界に根強く存在した傾向であつたが、<sup>(38)</sup>その後列強による中国分割が進行するなかにあつても、竹越の脳裏から、中国人の膨張性への懸念が消滅しなかつたことは特筆されてよい。竹越は四〇年と四五年の二度にわたり清国へも渡航しているが、その際の見聞をまとめた文章からも、「幾千年來の師恩に酬い、今後互に文明の事を共にして眞実兄弟国たることを期す可」という視点を讀み取ることが難しいのである。

### おわりに

以上、明らかにしたように、福沢と竹越の中国・朝鮮観には様々な差異が見られた。福沢が、朝鮮の現状を留学生との対話から直感的に幕末の日本と同様にとらえたのに対し、竹越は社会体制のあり方に着目して、朝鮮を武家政治に移行する以前の日本と同様の状態にあるとした。また福沢が、「方今東洋の列国にして、文明

の中心と為り他の魁を為して西洋諸国に当るものは、日本国民に非ずして誰ぞや」という使命感に基づいて、朝鮮の改革にのめりこんでいったのに対し、アジアとは「地理的空名」にすぎないと考える竹越にはそうした熱意は全く見受けられなかった。

さらに福沢の中国イメージが、日清戦争をはさんで東洋における「文明」の阻害者から「兄弟国」へと転換したのに対し、竹越は日本の膨脹にとつての脅威というイメージを日露戦後に至るまで持ち続けた。進化論的な発展段階説を承認する点で、福沢と竹越の間に共通性が見出せるのは確かであるが、福沢が日中朝三国をまとまりのある文化圏ととらえていたのに対し、竹越がそうではなかったことは、両者の大きな相違点と云うべきである。日露戦争以降の大陸進出のあり方を先取りしたものととしてこれまで否定的に取り上げられることが多かった福沢の「脱亜論」であるが、竹越の観点に立つならば、それは「亜細亜東方」を無理に結びつけようとする努力から生ずる嘆息であったと解釈できるのである。

竹越の創刊した雑誌『世界之日本』が、約五年で実質的に廃刊となった事実が物語るように、彼の世界主義は戦前期の日本を先導する思想たりえなかった。<sup>(39)</sup>しかし、ヨーロッパとアジアという世界区分にとらわれない姿勢は、現代にこそ見直されてよいのではなからうか。<sup>(40)</sup>

## 注

- (1) 福沢諭吉「金玉均暗殺に付き清韓政府の処置」『時事新報』一八九四年四月一三日、慶應義塾編『福沢諭吉全集 第一四卷』(岩波書店、一九六一年)三四一頁。ちなみに、金の遺体は清国の軍艦で朝鮮に送られ、各地で晒しものとされた。



- (2) 竹越与三郎『萍聚絮散記』（開拓社、一九〇二年）五四頁。
- (3) 竹越与三郎『世界の日本乎、亜細亜の日本乎』『国民之友』第二五〇号、一八九五年四月一三日、西田毅編集解説『民友社思想文学叢書第四卷 竹越三又集』（三一書房、一九八五年）二四四頁。
- (4) もちろん、平石直昭「近代日本の「アジア主義」」（溝口雄三・浜下武志・平石直昭・宮嶋博史編『近代化像』（東京大学出版会、一九九四年）所収）のように、福沢の東洋連帯論者としての側面に注目した研究は存在する。しかし、たとえば、本論にて取り上げる福沢の論説「支那の改革に就て」の知名度は一般に低いと言わざるを得ない。
- (5) 拙稿「福沢諭吉と竹越与三郎の比較思想史的研究―明治維新論を中心に―」（『近代日本研究 26』、慶應義塾福沢研究センター、二〇一〇年二月。
- (6) 以上の点に関しては、差し当たり、三谷博・山口輝臣『19世紀日本の歴史』（財団法人放送大学教育振興会、二〇〇〇年）を参照。
- (7) 福沢諭吉『世界国尽』、慶應義塾蔵版、一八六九年、慶應義塾編『福沢諭吉全集 第二卷』（岩波書店、一九五九年）五九三～五九四頁。
- (8) 丸山真男『文明論之概略』を読む 下（『岩波書店、一九八六年』三三三頁。
- (9) 福沢諭吉『文明論之概略』、著者蔵版、一八七五年、慶應義塾編『福沢諭吉全集 第四卷』（岩波書店、一九五九年）二五～二六頁。
- (10) 同上書、一八頁。
- (11) 福沢諭吉『時事小言』、著者蔵版、一八八一年、慶應義塾編『福沢諭吉全集 第五卷』（岩波書店、一九五九年）一八三～一八六頁。
- (12) 慶應義塾編『福沢諭吉書簡集 第三卷』（岩波書店、二〇〇一年）一一八頁。
- (13) 福沢諭吉「牛場卓造君朝鮮に行く」（『時事新報』一八八三年一月二日、慶應義塾編『福沢諭吉全集 第八卷』（岩

- 波書店、一九六〇年）五〇一頁。
- (14) よく知られているように、甲申事変に当たって、福沢は、「其筋書の作者たるに止まらず、自から進んで役者を選び役者を教へ又道具立其他万端を差図」（石河幹明『福沢諭吉伝 第三卷』（岩波書店、一九三二年）三四一頁）したと言われる。
- (15) 福沢諭吉「脱亜論」『時事新報』一八八五年三月一六日、慶應義塾編『福沢諭吉全集 第一〇卷』（岩波書店、一九六〇年）二四〇頁。
- (16) 徳富猪一郎『蘇峰自伝』（中央公論社、一九三五年）一八八〜一八九頁。
- (17) 前掲、竹越『萍絮絮散記』五五〜五六頁。
- (18) 福沢諭吉「対韓の方針」『時事新報』一八九八年四月二八日、慶應義塾編『福沢諭吉全集 第一六卷』（岩波書店、一九六一年）三二六頁。
- (19) 福沢諭吉「対韓の方略」『時事新報』一八九八年四月二九日、同上書、三二九頁。
- (20) 福沢諭吉立案・中上川彦次郎筆記『兵論』、慶應義塾蔵版、一八八二年、前掲、慶應義塾編『福沢諭吉全集 第五卷』三〇七頁。
- (21) 当時の中国人の日本留学については、佐藤慎一「留学ブームと思想的開国」（加藤祐三編著『近代日本と東アジア』〔筑摩書房、一九九五年〕所収）を参照。
- (22) 福沢諭吉「支那の改革に就て」『時事新報』一八九八年九月二二日、前掲、慶應義塾編『福沢諭吉全集 第一六卷』四七九〜四八一頁。
- (23) 「支那の今日の有様を見るに、何としても満清政府をあの儘に存して置いて、支那人を文明開化に導くなんと云ふことは、コリヤ真実無益な話だ。何は扱置き老太政府を根絶やしにして仕舞つて、ソレから組立てたらば人心こゝに一変することあらう」（慶應義塾編『福沢諭吉全集 第七卷』（岩波書店、一九五九年）二二四頁）という主張がそ

れである。

- (24) 前掲、竹越『萍絮散記』四四～四五頁。
- (25) 同上書、四五頁。
- (26) 徳富猪一郎『新日本之青年』、集成社、一八八七年、植手通有編『明治文学全集34 徳富蘇峰集』（筑摩書房、一九七四年）一一八頁。
- (27) 伊藤隆・酒田正敏・坂野潤治他編『近代日本史料選書7-1 徳富蘇峰関係文書』（山川出版社、一九八二年）一四頁。
- (28) 竹越の「福沢先生」によると、『世界之日本』創刊の計画を打ち明けられた福沢は、竹越の「必敗を期し、苦諫最も勉め、それでも竹越が「友人と約して、万般の準備あるを云ふや」、その「案を打つて大に怒」（前掲、竹越『萍絮散記』四六頁）ったというが、最終的には若干の経営資金を提供したようである（慶應義塾編『福沢論吉書簡集 第八巻』（岩波書店、二〇〇一年）二〇八～二〇九頁）。
- (29) 前掲、竹越「世界の日本乎、亜細亜の日本乎」、前掲、西田編集解説『竹越三又集』二四四～二四五頁。
- (30) 三谷博「アジア」概念の受容と変容（渡辺浩・朴忠錫編『日韓共同研究叢書11 韓国・日本・「西洋』』（慶應義塾大学出版会、二〇〇五年）所収）一八九～一九〇頁。
- (31) 前掲、竹越「世界の日本乎、亜細亜の日本乎」、前掲、西田編集解説『竹越三又集』二四三～二四四頁。
- (32) 竹越与三郎「深憂大患」『国民之友』第二五一号、一八九五年四月二三日、前掲、西田編集解説『竹越三又集』二四七頁。
- (33) 竹越与三郎『二千五百年史』（訂正十九版、開拓社、一九〇九年）七〇五頁。このような竹越の認識の史学的的位 置については、宮嶋博史「日本における「国史」の成立と韓国史認識」（同・金谷徳編『日韓共同研究叢書2 近代 交流史と相互認識I』（慶應義塾大学出版会、二〇〇一年）所収）を参照。

- (34) 孫文「大アジア主義」(一九二四年一月二八日、於神戸高等女学校講堂)、小野川秀美責任編集『世界の名著78 孫文・毛沢東』(中央公論社、一九八〇年)二五七頁。
- (35) 竹越与三郎「韓人教育に就ての謬見」『教育時論』一九〇六年一月五日、『比較殖民制度』(読売新聞社、一九〇六年)二二五、二二九頁。竹越の朝鮮統治論については、平石直昭「韓国保護国論の諸相」(宮嶋博史・金谷徳編『日韓共同研究叢書12 近代交流史と相互認識Ⅱ』(慶應義塾大学出版会、二〇〇五年)所収)を参照。
- (36) 竹越与三郎『南国記』(西社、一九一〇年)四頁。
- (37) 同上書、二〇九～二一〇頁。
- (38) この点については、竹越本人の『支那論』(民友社、一八九四年)「第四 支那人種世界を侵略せんとす」のほか、ハインツ・ゴルヴェイツァー著・瀬野文教訳『黄禍論とは何か』(草思社、一九九九年)を参照。
- (39) 昭和期の東亜新秩序や大東亜共栄圏の思想に見られるように、戦前期の日本において最終的なヘゲモニーを握ったのはアジア主義であった。ただし、明治期に福沢が唱えた東洋連帯論とそれらの内実はかなり異質である。福沢の東洋連帯論は、東アジア三国が西洋文明を導入して国内の専制的体制を改革した上で、圧倒的に強大な欧米諸国に対抗すべきことを説くものであったが、東亜新秩序や大東亜共栄圏の思想はそれなりに強国となった日本が、不況克服のためアジアに勢力圏を築くことを正当化すべく創り出されたイデオロギーだったからである。
- (40) ヨーロッパとアジアという二分割に代わる世界区分を提起した一例として、世界を資本主義が自生的に発達した第一地域(西欧及び日本)とそれが自生的に発達しなかった第二地域(中国世界・インド世界・ロシア世界・地中海もしくはイスラム世界)の二つに分ける梅棹忠夫の「文明の生態史観」を挙げることができる(『日本とは何か』、日本放送出版協会、一九八六年)。

〔後記〕本稿は、拙稿「竹越与三郎の維新史論と朝鮮観」(川口浩編著『日本の経済思想世界』、日本経済評論社、二〇〇

四年)の後半部に加筆を行ったものである。原稿をまとめる上で、平成二〇年八月の慶應義塾大学通信教育部夏季スクーリング「近代日本と福沢諭吉」で講義する機会を得たことは有益だった。関係者並びに拙い講義をご聴講下さった全ての方々に謝意を表す。